

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：14201
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2013～2015
課題番号：25370282
研究課題名(和文)F.V.ディキンズ研究(2)

研究課題名(英文)Biographical Study of F.V. Dickins

研究代表者

岩上 はる子 (Iwakami, Haruko)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：40184858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：F.V.ディキンズに関する初の評伝の完成に向けて、経歴のなかで欠落部分となっている時期について調査を行った。再来日中(1871-1879)については弁護士として辣腕を振るった「マリア・ルス号裁判」を中心に論じた。これまで不明となっていた帰国後からロンドン大学に就職するまでの足取りを追った他、晩年の地ウィルトシャー州シーンドでの日本研究の活動の日々を探った。版を重ねた浄瑠璃版『仮名手本忠臣蔵』の訳を検討し、ディキンズの翻訳が学術研究であったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In order to complete the first critical biography on F.V. Dickins, one of the early British Japanologists, I carried out research on his activities in Japan between 1871 and 1879. During his time in Japan, he had been working as a barrister in charge of various cases including the "Maria Luz" Case. I also traced his unknown days after he left Japan until he was employed as an assistant registrar at the University College of London University. I also explored Dickins' final days at Seend, Wilshire where he spent most of his time completing his Japanese study. I examined his translation work of "Chiushingura, or The Royal League: A Japanese Romance" to highlight his accurate and scholarly achievement.

研究分野：英文学

キーワード：ディキンズ サトウ 熊楠 日本研究 日本文学翻訳

1. 研究開始当初の背景

本研究で取り上げる F.V.Dickins(1838-1915) は、外交官アーネスト・サトウとほぼ同時期の幕末に英国海軍の軍医として来日し、通算 10 年を日本で過ごした第一陣の来日西洋人の一人である。『百人一首』を最初に英訳した他、『万葉集』を含む数々の日本の古典文学の翻訳を行うなど「日本研究」のパイオニアであるが、英国においても埋もれた存在であり、正当な評価と位置づけがなされているとは言えない。

日本でディキンズの名が知られたのは駐日公使パークスの伝記 (*The Life of Sir Harry Parkes, 1894*) の日本編の著者としてであり、東洋文庫に収められた同書の翻訳 (1984) において高梨健吉氏が略歴を紹介したのが最初である。その後、川村ハツエ氏『F.V. ディキンズ 日本文学英訳の先駆者』(七月堂、1997) によって、ディキンズの日本文学翻訳の業績が紹介された。英国においても評価は遅れ、ケンブリッジ大学のピーター・コーニッキ教授の編集によるディキンズ著作集 *Collected Works of F.V.Dickins* (7vols, Edition Synapse, 1999) が出版されたことで端緒が切られた。申請者はコーニッキ教授との共同研究により『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集』(*F.V.Dickins' Letters to Ernest Satow, Kumagusu Minakata and Others, Edition Synapse, 2011*) を刊行し、サトウや熊楠などに宛てたディキンズ書簡 135 通を収集翻刻し詳細な注を付け日本語訳を付けた。

第一期では、基礎資料となる書簡の整備、ディキンズの幅広い日本研究の概要の把握、断片的な伝記調査を行った。第二期(今期)では、第一期の研究成果を土台として、ディキンズに関する伝記調査と日本研究についての調査を行うこととした。履歴の概要はディキンズ著作集に寄せられたコーニッキ教授による序文に記されているが、欠落部分や

活動の詳細が不明な時期があり、それらの調査を中心に展開することとした。ディキンズ書簡の検証およびサトウ書簡との照合によって、共に日本研究を志し切磋琢磨しあったサトウとの交流、日本文学の翻訳において多大な貢献を得た南方熊楠との関係を明らかにすることで、ディキンズの活動の輪郭が見えてきている。

2. 研究の目的

一連の研究の最終目標はディキンズに関する最初の評伝を完成することにある。イギリスの日本研究の草分けの一人ディキンズの日本研究の全容を明らかにするだけでなく、幕末の旧日本との出会いから晩年の新日本への幻滅に至るまでの、ディキンズの日本観の変容を捉えることで、イギリスにおける日本研究の本質、西洋の東洋に対する「眼差し」を「異文化の衝突」という文脈のなかで捉えたい。

第二期となる今回の研究では、伝記における欠落部分を埋めることを課題の一つに据えた。再来日期间(1871-79)の動向については(1)弁護士活動(2)アジア協会における日本研究の二つのテーマを設定した。一つ目は、1872年に発生した歴史に残るマリア・ルス号事件で、裁判ではディキンズはペルー側の弁護士として辣腕を振るった。領事裁判制度の残る居留地での裁判の日々はディキンズにとってどのようなものであったのか。後年、この70年代を回想して「幻想と幻滅の時代」と呼ぶに至ったのはなぜなのか、ディキンズの弁護士活動を通して心境の変化を洞察する。二つ目は、1872年に日本で設立された日本アジア協会におけるディキンズの活動である。英国は進出した東洋諸国に王立アジア協会の支部を設置しその国の研究を行った。日本アジア協会は英国公使を会長としサトウやアストン、チェンバレンといった外交官や学者を委員とする学術機関と言える。同協会の活動状況を調査し、デ

イキンズの果たした役割や日本研究の背景を探りたい。

上記のテーマと並行して伝記の欠落部分の調査を行う。ディキンズは1879年に突然、帰国し、二度と日本に戻ることはなかった。その後1881年にロンドン大学の事務局に就職するまでの2年間の足取りはつかめていない。その空白部分をサトウ書簡などを手掛かりに明らかにしたい。ロンドン大学を定年退職した後の動向もつまびらかではない。ウィルトシャー州シーンドでの隠居生活は15年にわたるが、ディキンズの主要な日本文学の翻訳の大半はこの時期に成し遂げられたものである。この期間の書簡も残されているので、サトウからの来簡と照合することによって、ディキンズの日本研究の詳細や、晩年の生活ぶりも明らかになるだろう。

幕末の日本にいち早く上陸し、その歴史文化と文学に魅せられ日本研究にのめり込んだディキンズが、晩年になると変わり行く近代日本への幻滅を口にし、ほぼ半生をかけて取り組んだ日本研究に対しても懐疑的な言葉を口にするようになる。その軌跡はなにを物語るのか。ディキンズという一人の日本学者の人生を通して、日本が西洋によってどのように眼差されてきたのかを明らかにしたい。

3. 研究の方法

一次資料となるディキンズの著作集および書簡集、サトウの日記および書簡集はすでに入手済みである。また横浜居留地において発行されていた英字新聞(*The Japan Weekly Mail, The Far East*)の復刻版も、該当時期の部分は今期に購入することができた。これらの資料をひたすら読み整理していくことが基本である。

伝記調査については、国内では横浜居留地の現地視察や、横浜開港資料館及び国会図書館において関連資料の収集を行う。横浜開港資料館に所蔵されている居留地新聞の復刻

版、日本アジア協会会報、ブルーム・コレクションなどは必見の資料となる。国外においては国立公文書館(PRO)所蔵のサトウ文書、FO文書、戸籍調査を行う他、ディキンズの終焉の地ウィルトシャー州シーンドでの現地調査を行う。

4. 研究成果

F.V.ディキンズに関する最初の評伝執筆に向けて、再来日中(1871-79)の活動および帰国からロンドン大学に就職するまで(1879-82)および晩年の足取り調査を行った。その結果、これまで謎であった離日の背景、イギリスへの帰国直後の動静をつまびらかにすることができた。また、ロンドンでの南方熊楠との出会いとその後の協力関係、日本研究の継続と発展、退職後にウィルトシャー州シーンドで精力的に取り組んだ日本文学の翻訳など、ディキンズの生涯の概要を把握することができた。

ディキンズの日本観の大きな転換点となったと思われる70年代の横浜での弁護士活動については、マリア・ルス号裁判を中心に考察した。明治政府にとっても初めての国際裁判で多方面からの資料も豊富にある中で、一次資料としての価値の高い*The Japan Weekly Mail* (ディキンズは帰国の半年前に編集長に就任している)における報道を追った。事件の背景にある西洋諸国による植民地向けの奴隷貿易の歴史、英国を中心とする奴隷貿易廃止の動き、複雑な国際関係といった世界の情勢が見えてきた。また、横浜居留地における領事裁判権と居留地規則を盾とする居留地住民の価値観、各国領事や公使のさまざまな動きなど、裁判をめぐる居留地の動静をつかめた。ペルー側の弁護士として日本側を多いに苦しめたディキンズだが、後年、この7年間を「惨めな日々」と振り返っているように、日本の遅れた司法制度への批判だけでなく、居留地住民の価値観との衝突の日々であったことが伺われる。

横浜に日本アジア協会が設置された際にはディキンズは設立メンバーに名を連ね、後には理事を務めている。多忙な本業の傍らで、研究論文を発表するなど日本研究は積極的に推進されていたことがわかる。研究テーマや手法は学術的なものであった。日本アジア協会の活動、さらに英国における日本研究の展開のなかで、ディキンズの研究がどのように位置づけられるのかを来期の課題とした。

今期にはディキンズによる浄瑠璃版『仮名手本忠臣蔵』の翻訳も検討した。ミットフォードの「四十七士」によって西洋に紹介された赤穂浪士の物語を、ディキンズは浄瑠璃版の全訳という形で完成させた。ミットフォードは赤穂浪士の禁欲的な生き方や主君への忠誠心に西洋の騎士道精神に通じるものを見だし切腹の美学に共感したのに対して、ディキンズの主眼は『仮名手本忠臣蔵』を可能なかぎり原典に近づけた形で訳出することにあつたと思われる。文化的・歴史的背景を伝えるために、詳細な注、用語解説、歴史的背景の説明などを加えた研究書のような体裁になっている。言語学的に正確な翻訳をめざし、資料に基づく注釈の充実をはかる姿勢は、ディキンズが客観的・科学的な視点をよりどころとする研究者であつたことを示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

1. 岩上はる子「F.V.ディキンズと日本文学」『熊楠ワークス』(南方熊楠顕彰会) No. 41、28-32 頁、2013 年。
2. 岩上はる子「英文学叢書」と岡倉由三郎 日本の英文学受容について」『英学史研究』(日本英学史学会) 査読有り、第 46 号、29-50 頁、2013 年。
3. 岩上はる子「サトウ書簡から見たディキ

ンズの動向 1877 年から 1882 年まで」『関西英学史研究』(日本英学史学会関西支部) 査読有り、第 8 号、1-17 頁、2014 年。

4. 岩上はる子「F.V.ディキンズと日本文学『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について」『英学史研究』(日本英学史学会) 査読有り、第 48 号、1-16 頁、2015 年。

5. 岩上はる子「マリア・ルス号裁判はいかに伝えられたか *The Japan Weekly Mail* の報道を中心に」『関西英学史研究』(日本英学史学会関西支部) 査読有り、第 9 号(受理)

6. 岩上はる子「法廷弁護士としての F.V.ディキンズ マリア・ルス号裁判を中心に」『英学史研究』(日本英学史学会) 査読有り、第 47 号(受理)

[学会発表](計 3 件)

1. 岩上はる子「ブロンテ姉妹と男たち」日本ブロンテ協会 2013 年大会シンポジウム、滋賀大学、2013 年 10 月 19 日。
2. 岩上はる子「シーンドにおける F.V.ディキンズの活動」(招待発表) 日本英学史学会関西支部第 50 回記念大会、兵庫県立大学、2014 年 6 月 7 日。
3. 岩上はる子「Bronte Juvenilia: the literary apprenticeship of Charlotte Bronte?」Panel on Juvenilia for the Joint Meeting of The Jane Austen Society and The Bronte Society of Japan (招待講演) 日本オースティン協会 2015 年大会、フェリス女学院大学、2015 年 6 月 27 日。

[図書](計 4 件)

1. 岩上はる子「スミス・エルダー社主ジョージ・スミス 出版界の貴公子」『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像』(編著) 67-89 頁、ミネルヴァ書房、2015 年。
2. 岩上はる子「ブロンテ姉妹はいかに読まれたか 日本におけるブロンテ受容」『ブロンテと 19 世紀イギリス』、273-283 頁、大阪

教育図書、2015年。

3. 岩上はる子『時代のなかのブロンテ』(翻訳) *The Brontës in Context*, edited by Marianne Thormählen、第4章担当、大阪教育図書、印刷中。

4. 岩上はる子「アイルランド女性の脱神話化 カントリー・ガールの内なる戦い」『文学都市ダブリン』第14章担当、校正中。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩上はる子 (I W A K A M I Haruko)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号： 40184858

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：